

政課題や住民の多様なニーズに即応した施策を総合的かつ機動的に展開できるような見直しを行うとともに、既存の組織についても従来のあり方にとらわれず、スクラップ・アンド・ビルドを徹底することです。つまり、既存組織も常に社会経済情勢の変化、住民ニーズに即応できる組織にしておかなければなりません。

社会経済情勢の変化、住民ニーズへの即応と簡素かつ効率的な内部組織の運営と言う点では、理想と現実の差を見る思いがします。本村においては、その差を少しでも縮める努力をし、今回の再編協議の中で出された意見を行政運営に盛り込み、住民の皆さまが今以上に安心して暮らし、行政窓口に来られた際に、窓口事務で効率的に対応できるように職員一丸となって、事務の改善に努めていきます。

④国や県からの支援事業で「副村長」や「参与」の立場で組織の改編に関わるものの有無とその活用予定について

答弁 国および県からの職員派遣制度には、複数の制度があります。

まず、国からの制度としては、派遣制度として「地方創生人材派遣制度」があります。この制

度では、副村長や幹部職員および顧問・参与等として派遣するものです。

埼玉県からの派遣制度は、地方自治法の「県および市町村職員の派遣に関する要綱」による派遣制度で、常勤職員のみが対象となる派遣で、特別職は派遣できません。副村長として受ける場合は、退職派遣となり、一度埼玉県の職員を退職し、派遣先の市町村の職員となります。

任期終了後は、派遣元であった埼玉県の職員の身分に戻ります。制度としては以上のような内容ですが、本村では、村長の方針を政策に反映させるため、村の現状を理解されている方を足立村長が選任しています。

佐藤 真紀 議員

質問 東秩父村和紙の里について

①和紙の里リニューアルオープン後1年が経過した、これまでの実績と効果について

答弁 和紙の里来場者数と売上金額につきましては、リニューアル前では、来場者数8万154人、売上金額6193万7000円に対し、リニューアルオープン後では、来場者数14万1656人、売上金額7251万6000円となっております。来場者数については、6万

1502人増の前年比1.77倍、売上金額については、1057万9000円増の前年比1.17倍となっております。

JA農産物直売所のレジ通過者数（購入者数）と売上金額につきましては、リニューアルオープン前では、レジ通過数8万7482人、売上金額1億5182万4000円に対し、リニューアルオープン後では、レジ通過者数11万3994人、売上金額1億7718万7000円となっており、レジ通過数については、2万6512人増の前年比1.3倍、売上金額については、2536万3000円増の前年比1.17倍とそれぞれ増加しています。

全体の来場者数につきましては、リニューアルオープン前では、月平均7300人に対し、計測値が変更になっていることで正確な前年比ではありませんが、平成29年4月からの数値で月平均4万2000人、単純計算で5.7倍となり道の駅としての休憩スポットとして多くの方が訪れてきています。

②東秩父村まち・ひと・しごと創生総合戦略の施策の中で「和紙を通じた雇用拡大」として、重要業績評価指数（KPI）で掲げた和紙の里従業員数25人の

目標、今後の事業展開について

答弁 政府は「まち・ひと・しごと創生法」が、平成26年11月21日に成立したことにより、我が国の人口問題についての将来展望を示し、長期ビジョンと、平成27年度から5年間を計画期間とする「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を閣議決定し、

地方創生法に向けた各種施策を展開してきました。例としては、村の伝統産業「手漉き和紙の技術後継者の育成事業」は重要課題ですが、中でも国土交通省が進めた、過疎地域等集落ネットワーク圏形成支援事業は「小さな拠点」の形成推進事業として、将来にわたり地域住民が暮らし続けることが出来るよう、

生活や仕事を支えるため住民主体の取組体制づくりや活動・交通拠点の強化、生活サービス機能の集約・確保、周辺との交通ネットワークの形成等による利便性の高い地域づくりを推進してきました。

本村において、小さな拠点として「和紙の里のリニューアル」を行い、道の駅「和紙の里ひがしちちぶ」等をオープンさせ、村民のくらしを支える、また、和紙の里の集客増を図るなど、事業に力を注ぎました。さらに、国が取り組んでいる

「国民一人ひとりが輝ける1億総活躍社会」への提言を重く受け止めて、努めていきます。

質問 細川紙後継者育成支援事業について

（内容）今年度より、細川紙・大河原和紙技術者研修生支援事業がスタートしたが、この事業の最終目標をどのように設定しているのか

答弁 平成29年4月より開始しました3年間の当事業の最終目標は、研修終了後の研修生の「自立」です。研修を終了した後、どのように和紙職人として生計を立てられるかが、一番の課題と捉えています。

紙漉きは、手漉き技術を身に着けるまでには、10数年かかると言われております。その間研修を終え和紙職人として手漉き和紙を作り続けても、現在は和紙の需要が少ないため生活をしていくためには難しい面が、一番の問題と言えます。

今回の研修生は大切な村の宝です。この研修生が研修終了後自立し、手漉き和紙職人を途絶えさせず伝承させていくために、村は空き家や公有地を利用して和紙工房の確保、研修施設の計画が必要と考えます。そして、今回の研修生が今後、講師となって新たな研修生を育成する仕